

# 花火製造職人 筒井良太さん

## 消えかけた国産線香花火の灯を守る

かつて国産の線香花火が消滅の危機を迎えたことがあった。安い輸入品に押されて、最後に1社だけ残った国産メーカーが廃業することになったのである。その危機を見かねて立ち上がったのが、筒井良太さんだった。技術と道具を受け継ぎ、自ら線香花火づくりに取り組んだのである。そして現在、筒井時正玩具花火製造所がつくる線香花火は贈答品としても重宝される一方、都心のアパレル店や雑貨店などでも売られ、日本の夏に鮮やかな彩りを添えている。

### 一番地味で、一番派手な花火

近所の子どもたちが集まって、庭先や路地で開かれるささやかな花火大会。最初に火をつけるのは、たいい線香花火。そして最後に火をつけるのも、やはり線香花火だ。

真っ赤に燃えた小さな玉からパチパチッと音をたてて火花が飛び散る。周りを囲むように集まった子どもたちは、黙ってその火花を見つめる。やがて火花が出なくなり、真っ赤だった玉も炭のように黒くなる。そしてしばしの静寂のあと、子どもたちはそれぞれの家へと帰っていく。

なんとなく物悲しい気分を残して、小さな花火大会はそうして終わるのだった。

たいていの人が、子ども時代にそんな経験をしているのではないだろうか。花火は日本の夏の風物詩。線香花火はその中でも一番地味で、でも、一番華やかな花火だった。

10年ほど前、国内で線香花火をつくっているメーカーは1社しかなかった。だが、最後に残ったその1

社も廃業することになった。1970年代半ば頃から安価な輸入品が市場に出回るようになり、国産の線香花火は価格で対抗できなくなっていったのだ。

「これで国産の線香花火はもうなくなってしまおう」

花火業界ではそんな声がささやか

ぶ状態は「松葉」と呼ばれる。そして火勢が衰え、火花も弱くなると「散り菊」と称される。線香花火がそうして変化していくさまは、人の一生にもなぞらえられる。生まれ、育ち、成熟し、そして晩年を迎えるというわけだ。

「江戸時代から続く日本の伝統文化ともいえる線香花火の灯を絶やしてはいけない」

筒井時正玩具花火製造所の3代目に生まれた筒井良太さんの心の中で10年前、赤い火が灯った。当時、筒井さんは廃業を決めた製造所を手伝っていたのである。

### 松煙、硝石、硫黄を配合

「自分が受け継ぐ」

そう決めると、筒井さん

は線香花火づくりの技法を懸命に修得した。100年以上使われてきた火薬の配合機なども譲り受け、実家の筒井時正玩具花火製造所に戻って線香花火づくりを始めたのである。

線香花火に使う黒色火薬は、松煙、硝石、硫黄を配合してつくる。松煙は松をいぶした煤で、書道の墨など



左上、火薬を入れこより状に纏っていく。ベテランになると1本約10秒。左下、火薬を量るお手製のさじと火薬箱。右、100年以上使われている配合機。

れていた。

江戸時代に生まれた線香花火は、日本独自の花火である。火をつけると、どんどん丸く大きくなっていく赤い玉は、花を咲かせる前の「蕾」と呼ばれる。やがてパチパチッと力強い火花が飛び散る状態は「牡丹」、さらに勢いを増して火花が大きく飛



つつい・りょうた 1973年、福岡県生まれ。祖父の筒井時正さんは、ねずみ花火の考案者。筒井時正玩具花火製造所の3代目に生まれ、子どもの頃は火薬をおもちゃ代わりにして遊んだ。高校卒業後、自動車関連の会社で3年間働いた後、家業を継いだ。剣道4段。最近は、チタニウム、アルミニウムなどを火薬に配合した「金属花火シリーズ」も開発した。





花火に火をつけると、酸素を吸い込みながら火の玉はどんどん大きくなっていく。花が咲くまで、“蕾”は大きくふくらむ。



そのうちにパチッ、パチッとひとつずつ火花が散り出す。まるで一步一步確かめるような様子は“牡丹”と呼ばれ、その間隔は徐々に短くなっていく。

にも使われている。筒井時正玩具花火製造所で使っているのは、松の切株を30年以上寝かせた宮崎県産の松煙だ。

「原料の配合割合は秘伝です。ただ、松煙は天然のものですから、そのときによって油分が多かったり少なかったりします。そのため配合の割合を一定に保っても、火をつけたときの燃え方は微妙に違ってきます。だから配合してできた黒色火薬を広げて、異なるところから複数選んで火をつけてみます。それで燃え方のいいところの火薬を選びます。全体的に結果がよくない場合は、配合し直します」

筒井さんは以前、人に頼まれて松煙の代わりにカーボンファイバーを配合してみたことがある。だが、それで作った火薬だと火花が全然飛ばなかったという。やはり、線香花火は松煙でないとダメなようだ。

1回につくる黒色火薬の量は20キログラムほど。まず、松煙、硝石、硫黄をふるいにかけてうえて、配合機にかけて5～6時間、配合する。

そうしてできあがった火薬は紙袋に入れ、安全な場所で1年間、寝かせる。そうすると火花が安定するのだという。

### 火薬の量は0.08グラム

火薬ができたら、今度はそれを紙の中に入れる作業だ。筒井さんが「さじ」と呼ぶ手づくりの道具で火薬を掬い取り、すりきると、ほぼ正確に0.08グラムの分量になる。

「火薬の量が1%でも違うと、火花の飛び方が違ってきます。火薬が多すぎると火をつけて玉になったとき落ちやすくなってしまいます。職人たちには、0.08グラムを100%として、95%くらいにするように指示しています」

という筒井さん自身は「きっちり100%の分量にすることができですが、それでもときどき微妙に狂うことがあります」と、語る。

火薬を紙の中に入れる作業も熟練が必要だ。紙をこより状に繕っていきながら火薬を包んでいくのだが、

中に空気が入っていると紙だけが先に燃えてしまう。そうならないように指先にしっかり力を入れて繕っていく。とくに大事なのは、火をつけて高温になった玉を受ける“首”の部分だ。

「玉の温度は最高で800度くらいになります。それを薄い紙のこより1本で支えないといけないのですから、指先に神経を集中させてしっかり繕っていきます」

そうしてできあがった線香花火は、まず試しに火をつけてみる。うまく火薬を紙の中に収めたつもりでも、火花があまり飛ばなかったり、玉がすぐ落ちたりすることもあるからだ。

### 東京のセレクトショップでも販売

筒井時正玩具花火製造所では、線香花火に使う紙の裁断や染も含めてこうした作業をすべて社内で行っている。火薬を紙で包んだ線香花火(長手牡丹)の他に、わらの先端に火薬をつけたスポ手牡丹もつくっている。

episode 3  
松葉  
[まつば]

火花は勢いを増していき、線香花火のクライマックス“松葉”に。パチパチパチと火花が散る音とともに、枝のように火花の先から火花が散っていく。

長手牡丹は関東風、スポ手牡丹は関西風ともいわれる。

スポ手牡丹の場合、火薬に<sup>にかわ</sup>膠や松やにも配合するので、気温や湿度の低い冬につくる。現在、国内でスポ手牡丹を製造しているのは、筒井時正玩具花火製造所だけである。

これらの線香花火は、輸入物に比べると火花の飛び方が美しいだけでなく、長持ちするという特徴もある。実際、あるテレビ局が計測したところ、安価な線香花火に比べると筒井時正玩具花火製造所の線香花火は1.5倍くらい長持ちした。

また、筒井さんはつくるだけでなく、新たな販売チャンネルも開拓した。従来はすべて問屋経由で販売していたが、それでは問屋がつくる花火セットの1アイテムとして入れられるので、どこのだれがつくったものか、消費者には全く分からない。そこで筒井さんがギフトショーに出展したところ、意外なところから引き合いがきた。有名なセレクトショップが「店に置きたい」と言ってきたのだ。今ではアパレルショップや雑貨店な

どにも、問屋を通さず直接卸している。

### 最高級品は40本で1万円

3年前からは贈答用の線香花火も売り出した。徹底して素材にこだわった商品で、紙は福岡県八女市の手すき和紙を使い、それを草木染で染色している。

妻の今日子さんのアイデアで、持ち手の部分の紙を花卉の形にデザインした線香花火が桐の箱に入った最高級の「花々」という商品は、和蠟燭と蠟燭立てがセットになって40本入りで1万円。線香花火に1万円出す人がいるのかと思うかもしれないが、結婚式の引き出物や企業のノベルティなどに使われ、好評だという。

線香花火以外の商品も、30種類くらいつくっている。

去年は、製造所の敷地内に事務所と店舗を兼ねた花火のギャラリーも開設した。

「夏休みの終わりとか年に何回か、



episode 4  
散り菊  
[ちりぎく]

勢いが徐々に弱まり、花びらが散るように火花が一本、また一本と散っていく姿は“散り菊”。火の玉が消えると線香花火の一生は終わる。

地元の店も参加するイベントを行っています。子どもたちに花火の体験をしてもらうのが大きな目的です。都市部では最近、花火をすると近所から煙が迷惑だとかうるさいなどの理由でクレームがついたりします。子どもの頃に花火を体験していないと、大人になってから花火を懐かしく感じる気持ちが育ちません。ギャラリーでは線香花火以外にも数十種類の花火をバラで売っています。自分の好きな花火を一つひとつ選んで買う楽しさも子どもたちに知って欲しいのです」

ギャラリー開設の目的を、筒井さんはそう説明する。

最近さまざまなワークショップに招かれる機会も増えている。この8月には東京・渋谷で開かれる大手小売店主催のワークショップに参加する予定だ。

子どもたちの輪の中で、線香花火の花が咲き、笑顔の花が咲く。

そんな平和で美しい光景が、これからずっと日本の夏の風物詩であって欲しいものである。